

平成31年4月1日

立正大学地球環境科学部環境システム学科

立正大学大学院地球環境科学研究科環境システム学専攻

環境気象学分野

立正大学環境気象学分野助教に平田英隆博士が就任

～爆弾低気圧から熊谷猛暑まで視野に入れて「大気海洋相互作用研究室」を主宰～

定年退職された吉崎正憲教授の後任として講師へ昇任した鈴木パーカー明日香助教の後任として、立正大学地球環境科学部環境システム学科環境気象学分野助教に、新たに平田英隆（ひらた・ひでたか）博士が平成31年4月1日付けで着任した。

平田英隆博士は、平成元年生まれの愛知県出身で、平成24年3月に富山大学理学部地球科学科を卒業の後、同年4月に九州大学大学院理学府地球惑星科学専攻修士課程に進学し、平成26年3月に同課程を修了、同年4月に地球惑星科学専攻博士課程に進学した。平成29年3月に九州大学大学院博士課程を修了して博士（理学）の学位を取得した。学生時代、一貫して川村隆一教授に師事した。学位請求論文タイトルは、学士論文が『11月にベンガル湾で発生する熱帯低気圧とアジアジェットの相互作用に関する研究』、修士論文が『北半球夏季における台風の遠隔影響－台風と太平洋高気圧のスケール間相互作用－』、そして博士論文が『Roles of Moisture and Heat Supply from Warm Currents in the Rapid Development of Extra-tropical Cyclones』であり、低気圧と海洋の相互作用研究を専門とする新進気鋭の研究者である。



平田英隆助教近影

平田英隆博士のこれまでの研究成果は、以下の学術論文として公表されている。

A positive feedback process related to the rapid development of an extratropical cyclone over the Kuroshio/Kuroshio Extension.

Monthly Weather Review, **146**, 417-433, 2018.

A positive feedback process between tropical cyclone intensity and the moisture conveyor belt assessed with Lagrangian diagnostics. *Journal of Geophysical Research: Atmospheres*, **122**, 12,502-12,521, 2017.

Response of rapidly developing extratropical cyclones to sea surface temperature variations over the western Kuroshio-Oyashio confluence region. *Journal of Geophysical Research: Atmospheres*, **121**, 3843-3858, 2016.

Influential role of moisture supply from the Kuroshio/Kuroshio Extension in the rapid development of an extratropical cyclone.

Monthly Weather Review, **143**, 4126-4144, 2015.

Scale interaction between typhoons and the North Pacific subtropical high and associated remote effects during the Baiu/Meiyu season. *Journal of Geophysical Research: Atmospheres*, **119**, 5157-5170, 2014.

Large-scale vapor transport of remotely evaporated seawater by a Rossby wave response to typhoon forcing during the Baiu/Meiyu season as revealed by the JRA-55 reanalysis. *Journal of Geophysical Research: Atmospheres*, **119**, 8825- 8838, 2014.

Remote forcing and response of tropical cyclones over the Bay of Bengal to the Asian jet variability in late fall. *SOLA*, **9**, 27-31, 2013.

博士課程進学時から学位取得までの間、九州大学大学院理学府・日本学術振興会特別研究員（DC）に従事していたが、学位取得直後の平成 29 年 4 月 1 日以降は、名古屋大学宇宙地球環境研究所・日本学術振興会特別研究員（PD）に着任し今日に至っていた。

平田英隆博士は、様々な気象データセット（再解析データ、衛星データ、気象庁観測データ）や領域雲解像度モデルを利用して低気圧の構造および時間発達を詳細に再現し解析を行う研究手法を得意としているが、現場での観測にも強い興味をもっており、梅雨や北陸豪雪のゾンデ観測やレーダー観測、大気海洋相互作用の観測航海に参加してきた。

平田英隆博士は、立正大学着任後は「大気海洋相互作用研究室」を主宰し、従来の研究活動を継続するとともに、立正大学環境気象学分野に導入・運用されている総合気象観測システムや可搬型ドップラーライダー、GPSゾンデのデータ集積・解析システム構築ならびにその活用による熊谷市周辺における夏季の高温や南岸低気圧に伴う降雪等の研究への貢献も期待されている。

平田英隆助教の着任により、立正大学環境気象学分野は昨年度まで通り 4 名体制（教授 2 名、講師 1 名、助教 1 名）を維持することとなった。これにより環境気象学分野のみならず、環境システム学科全体としても、教育・研究体制が維持・強化され、教育・研究活動が活発化することが期待される。

背景

平田英隆助教が所属する立正大学地球環境科学部環境システム学科環境気象学分野は、個々の教員の教育・研究活動とともに、熊谷～高崎・前橋にかけた関東平野北西部猛暑の発生メカニズム解明を目的とした観測的研究やコンピュータシミュレーション解析研究を推進している。ヒートアイランド等の地表面熱収支の差に起因する比較的小規模な現象を専門とする中川清隆教授と、ロスビー波砕波等の大規模な現象を専門とする渡来靖教授、およびメソ循環系ダウンスケーリング等の中規模な現象を専門とする鈴木パーカー明日香講師に、新たに大気海洋相互作用を専門とする平田英隆助教が加わったことにより、立正大学地球環境科学部環境システム学科環境気象学分野はバランスよく各分野の研究者 4 名が揃った私立大学としては屈指の気象教育機関の体制を今後も維持することとなった。

立正大学地球環境科学部環境システム学科の卒業要件総単位数は126単位だが、環境気象学分野で卒業論文を執筆して卒業する際における気象学関連のカリキュラムにおける必修科目および選択必須科目は以下の通りであり、卒業までの修得単位数は最低30単位、最大40単位に及ぶ。

学部1年必修科目

気象と水の科学 (2単位)

環境気象学概論 (2単位)

環境調査の基礎および実習 (2単位)

専門科目A群 (学部2年8単位必修)

気候・気象学 (2単位)

総観気象学 (2単位)

大気大循環論 (2単位)

環境気象学実習 (2単位)

専門科目B群 (学部2～4年6単位選択必修、それ以上の単位もすべて卒業要件単位)

気候変動論 (2単位)

微気象学 (2単位)

大気環境モニタリング (2単位)

大気環境シミュレーション (2単位)

温暖化と酸性雨 (2単位)

都市大気環境 (2単位)

——以下2科目は気象分野選択必修科目ではないが、気象分野教員が担当——

環境流体力学 (2単位)

シミュレーション技術 (2単位)

学部3年必修科目

セミナーの基礎 (2単位)

セミナー (4単位)

学部4年必修科目

卒業研究指導 (卒業論文含む) (4単位)

平田英隆助教は、上記の授業科目のうち環境調査の基礎および実習 (2単位) および環境気象学実習 (2単位) を担当するとともに、物理学実験 (2単位)、地学実験 (2単位)、フィールドワーク (2単位) および海外における環境保全活動実験 (2単位) も担当することとなる。

また、平田英隆助教は、立正大学大学院地球環境科学研究科環境システム学専攻の教員資格審査においてM合と判定され、同大学院の実験実習科目の指導も担当する。